18　病院臨床心理部門における高次脳機能障害者への対応の動向
―平成 18 年度と平成 23 年度との比較から―

病院　リハビリテーション部　臨床心理　小出千鶴子、宮澤史穂、野口玲子、色井香織
山﨑朱乃、富岡純子、大熊久美子

【はじめに】平成 13 年に高次脳機能障害支援モデル事業がスタートしたのを機に臨床心理部門での高次脳機能障害者への対応は急増し、現在も中心的な業務となっている。また、近年、外来患者の増加に伴い、当部門の業務内容にも変化が生じ、課題も変容しつつある。そこで、当部門における高次脳機能障害者への対応について、普及事業化された平成 18 年度と、5 年後の平成 23 年度の業務内容を比較検討したので報告する。

【方法】平成 18 年度と平成 23 年度に心理が対応した高次脳機能障害患者について、全患者に占める割合、原因疾患、麻痺の程度、実施内容、受傷・発症から支援開始までの期間、支援期間、帰結等を分析した。

【結果】１）高次脳機能障害患者の割合：高次脳機能障害患者の割合は全患者のうち平成 18 年度は 59%、23 年度は 78%と増加している。

２）原因疾患：低酸素脳症、脳炎、脳腫瘍といったその他脳疾患の患者の割合は 18 年度は 8%、23 年度は 19%と増加している。

３）麻痺の程度（入院患者）：麻痺の程度について上肢はMFS、下肢はBrsで調べたところ、18 年度に比べ、23 年度はいずれも麻痺が軽度の患者の割合が増加している。

４）実施内容：入院患者では個別指導（認知訓練、在宅指導、心理調整など）が 18 年度は 24%、23 年度は 54%と増加している。反対に外来患者では心理検査が 18 年度は 23%、23 年度は 36%と増加している。

５）受傷・発症から支援開始までの期間：支援開始までの期間を平均すると、18 年度は入院が 237 日、外来 593 日、23 年度は入院 431 日、外来 1152 日である。入院･外来いずれも 23 年度は支援開始までの期間が長期化している。

６）支援期間：支援期間を平均すると 18 年度は入院が 99 日、外来 317 日、23 年度は入院が 78 日、外来 64 日である。外来から支援を開始した患者の場合、3 ヶ月以内の終了が 18 年度は 56%に対し、23 年度は 80%となり、短期化している。

７）帰結：18 年度は復職 32%、復学 8%、23 年度は復職 37%、復学 10%である。自立支援局への移行は 18 年度 5%、23 年度 12%と増加しており、職リハは 18 年度 3%、23 年度 4%である。

【考察】入院患者については麻痺が軽度で高次脳機能障害を主症状とするケースが増加し、それに伴い、個別指導の割合も増加している。外来患者については、受傷・発症から支援開始までの期間が長期化しており、その背景には、適切な支援に結びついていないケースや後遺症認定等の評価目的で来院するケースの増加があるものと考える。以上のことから、社会復帰に向けたより適切な支援へとつなげるためにも、心理アセスメント技術の向上および多様なニーズに合わせた心理的支援に努めていくことが重要である。